

4 真っ白な鹿

森の中を歩いていたのは  
母と娘のふたり連れ  
悲し気に足どり重く歩む娘の傍<sup>かたわ</sup>らで  
母親はうたいつづけていた

「マーガレット どうしたの 5  
そんなに悲しそうに青ざめて  
辛い定め<sup>さだめ</sup>の恋をしているの  
それとも恋人がつれないの」

「わたしが悲しそうに見えるのは 10  
つれない恋人のせいではなく  
緑の森に隠れて暮らす  
辛い日々のせいなのです

明るい陽の光の下では  
娘の姿のままですが  
九日目の真夜中になると必ず 15  
真っ白な鹿になってしまいます

緑の森中を  
猟犬や獵人<sup>かりゆうど</sup>を連れた者たちに追われます  
わたしをしつこく追い詰めるのは  
いつだって立派なお兄さま」 20

. . . . .

「おはよう 母さん」 「おはよう 息子よ  
おまえの立派な獵犬<sup>いぬ</sup>たちはどこにいるの」  
「ああ 楽しい緑の森の中で  
真っ白な鹿を追っていますよ

獵犬<sup>いぬ</sup>たちは三度鹿を追い詰めましたが 25  
その度に逃げられました  
四度目にあの真っ白な鹿を追う時には  
必ずや仕留めさせましょう」

・ ・ ・ ・ ・

森から戻ってきた番人が  
告げたことには 30  
「野鹿の中に人間の娘の金髪など  
見たことはありません

野鹿を森の中  
東へ西へ追いましたが  
人間の娘の胸をもつ真っ白な鹿など 35  
見たことはありません」

マーガレットの兄がワインとパンを前に  
立ち上がってこう言った  
「聞いてくれ 俺にはたった一人妹がいたが  
どうやらその妹を死なせてしまった 40

足と頭の場所に石を置き  
愛する妹を埋葬してくれ  
白いバラと赤いバラで  
その美しい<sup>からだ</sup>身体を覆ってくれ

俺は緑の森へ行かねばならない 45  
身を守る屋根もいらぬ  
これから七年の間横たわろう  
サンザシの下の草の上に」

(宮原牧子訳)